

平成 30 年度 研究計画書

Research Plan FY2018

講座名・職名 Course Title・Job Title	アジア II 講座 特任准教授
氏名 Name	Htet Htet
専門分野 Academic Field	言語学

平成 30 年度 研究計画（ホームページで公開） Research Plan FY2018 (Post on Website)

主たる研究テーマ Principal Research Subject	ビルマ語における数に関する表現
--	-----------------

研究計画 (400 字～500 字で記入すること。) Research Plan (Approximately 100 Words)

この研究では、ビルマ語の数に関する表現を多く収集することで、こうした数の表現がミャンマー社会の中でも重要な位置を占めていることを明らかにする。

本研究は、3つのパートに分けることができる。初めのパートとして、数に関連するビルマ語の語彙を収集することが挙げられる。2番目のパートとして、意味論のアプローチをとって、言語表現の中で各数がどのように使われているかを詳しく考察していく。そして、3番目のパートでは、「モノを数える際に用いられる語」の再考に重点を置く。以上の点を詳細に調査するは、社会生活の中で使われている状況、実際の発話における意味も十分考慮に入れて研究を進める必要がある。

例として、「1」という数を含む表現には、တစ်ကိုယ်တော် /dāgòdà/ 「単身」、တစ်ကောင်ဘွား /dāgàunbwá/ 「独り立ちした人（、またはたくさんいる中での特別な人）」をはじめとした表現がある。また、「2」という数に関しても、နှစ်ကိုယ်ကြား /hnākòjá/ 「水入らず」やနှစ်ပါးဘွား /hnápátwá/ 「デュエット・ダンス」といった表現が見られる。တစ်ကိုယ်တော် /dāgòdà/ と တစ်ကောင်ဘွား /dāgàunbwá/ は、どちらも「1」という数を含む点で共通しているが、その指示する内容は異なる。そこで、本研究は比喩的な意味があるものも含め、具体的な例文を挙げながら、数に関する表現の全体像を明らかにしていく。なお、本研究は、ビルマ語にある「0」をはじめ、၁၀၅ /téin/ 「十万」、၁၀၆ /tán/ 「百万」、၁၀၇ /tinchè/ 「阿僧祇、無数」に至るまでの広い範囲を調査対象としている。この研究の成果は、ミャンマー語とミャンマー文化を深く理解する上での助けとなるだけでなく、外国人学生にビルマ語への興味を抱かせるきっかけにもなるであろうと期待している。

共同研究可能な分野 Research Fields feasible for joint research *1					
キーワード Keywords*2	対照言語学	ビルマ語	日本語	数表現	比喩